
東京が地図から消えた日

秋山秋水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京が地図から消えた日

【Zコード】

Z6400C

【作者名】

秋山秋水

【あらすじ】

大都会・東京のある日。クリスマスイブに沸く東京に悲劇が襲う。高高度を飛行する軍用機。レーダーにもかからず、その母国でさえ秘密にされたその軍用機の中には原子爆弾が積まれていた・・・！

第一部（前書き）

第一次世界大戦中、一度の原子爆弾をその懷に食らった日本。しかし昨今、それを忘れてしまっている事態はどうしたことだらうか？

第一部

広島に原爆が落とされたのはいつだつただろ？

では、長崎に原爆が落とされたのは？

いづれにせよ、生まれも育ちも都会っ子、本よりも液晶好きの世代のさきがけを生きたわたしには分からぬ。

ただ、東京に原爆が落とされた日は忘れない。

あの日がわたしのすべての命日なのだから。

2007年 12月 24日

「総理」

補佐官の一人が首相官邸最上階にある執務室に入るなり、手にした書類をかけた。

「どうやら本当のようです」

総理の机にたたきつけるように置いたその書類は先ほどプリントアウトされたばかりのもので、まだ機械のぬくもりが残つてゐる。総理は老眼鏡を取り出し、かけるなり、その文書に食い入るようにして挑んだ。

「本當だ・・・・・。すぐにアメリカ大統領に連絡を・・・・・。！」

「すでにしております」

補佐官の声は上ずつてゐた。それもそのはず、日本が破滅するやもしけない危機なのだ。

しかし補佐官は自分の任務を心得てゐた。補佐官の表情は硬い。

「総理、すぐさま準備をお願いします」

総理は上目遣いに自分の補佐官を見た。補佐官の男はゆるぎない、断固とした口調で言った。

「避難です」

「メリー・クリスマス！！」

ミニスカサンタといつ、寒い寒い冬の夜景の中には似つかない格好をした、まだ大学生ほどであろうかという女性の声だ。振り返るなり、その手元に風船が押し当てられた。ヘリウムのはいった、上にふわふわと浮いてしまうタイプのものだ。

「お子さんにもどうぞ！」

若い女性は満面の笑顔でそういってくれた。その笑顔があまりにも自然で、私は不覚にも笑顔でうなづいていた。

さつと、若い女性は横に一步ずれた。あつと気づいたときには、もう一人の女性 ベテランの店員にケーキの箱を押し当てられた。

「今日という夜にはケーキです！」

わたしは払わざるをえないな、と直感した。

「あ、おかえりなさい」

時刻は9時を少し回ったころだろうか。わたしは家庭の温かみに帰ってきたころを素直に心から喜んだ。この日だけは早く帰つてこられてよかったです。

「克弘は？」

私は何よりも先に妻に向かつてそういっていた。しかし、それを聞く、台所でこちらに背中を向けながら料理をする妻は言葉をにじらせた。

「その・・・・そこの部屋よ

え？、という呆然とした思いを引きずりながら、わたしは背後の引き戸をそつと開いた。

あちやあ。

わたしは心なしに落胆した。

わたしの息子、克弘はすでに眠った後だった。その手には日曜日の早朝に放送している戦隊ヒーローのソフビ人形が握り締められている。去年のクリスマスに購入してあげた代物だ。まだ大事につかっているところを見ると、相当のお気に入りだ。一度はがっかりしてしまつたが、心の中に湯水のような暖かさが流れ込んだ。

「メリークリスマス！」

パン！という音が鳴った直後、振り返り返り返りする肩にふわりと乗るものがあった。

妻はクラッカーを持ち、にっこりと、白い歯をいっぱいに見せていた。肩に紙ふぶきが乗っていた。

「お疲れ様、パアパ」

これでもいいな。わたしはフツといつため息とともにこわう思った。

『（じちうG - 1機、じちうG - 1機）』

『（じちう司令部、じちう司令部。感度良好、ビューティ）』

『（投下予定地点に近づいた。天候最良。雲ひとつないことはこのことだ）』

『（こちらも確認している。速やかに決行せよ）』

『（ア解）』

『（こちら司令部、G - 1機。幸運を祈る）』

『Oh - No』

『（どうした、G - 1機）』

『（いや、何。あなたの言葉におもわず言つてしまつた）』

『What？』

『（本当に神の）加護が必要なのは俺らじやない。日本国民だ）』

『（通信終了）』

わたしがそれを見たわけではない。よつて、わたしは無防備など

「こうを襲われたというわけだ。

「何かしら？」

「え？」

「あの音」

確かに耳をすましてみると、地響きに近い音がする。それが近づいてくるのも分かる。急にわたしは底知れぬ不安に襲われた。それは妻も同じなようだ。

カタカタ。テーブルの上に乗つかつた、七面鳥を切るためのナイフとフォークが皿にふれあい、不協和音を奏でた。そのときだつた。わたしは吹き飛ばされた。すべてが吹き飛んだ。わたしも妻も、皿も、椅子もテーブルも。わたしの家も。

妻の悲鳴がかすかに聞こえたが、すべて轟音にかき消された。わたしの悲鳴もそうだろう。ハスキーボイスとカラオケではひやかされるわたしの声は決して小さくなく、甲子園球場でもよく通るはずだ。しかし、自分の声さえ聞こえなかつた。

自分の体が地面に叩きつけられたときの痛みをわたしは鮮明に記憶している。グシャツといつてわたしの腕が折れた音も。強烈な一撃が過ぎ去つた後、わたしは目を開けることさえしばらぐの間はできなかつた。

目をつぶりながら、自分におきた出来事について、思惑をめぐらせた。ありとあらゆる仮定も、自分を襲つたあの一撃を証明することができない。自分はいつたい何に襲われたのだろう？

目をようやく開けられるようになつたとき、自分の神経も同時に活動を再開しはじめた。一度は植物人間のようにしてすべての情報を遮断したわたしの脳も、奇跡的に視神経とともに復活を遂げることができたのだ。

わたしはよろよろと立ち上がつた。

妻はすぐそばに横たわっていた。わたしと違い、妻は運が足りな

かつた。そういってしまえば簡単なことだが、その姿はあまりにもむごすぎた。ちくしょう。それが開口一番の言葉だつた。だが、泣くことはできなかつた。一度毒づいたまま、わたしはどこに向かう意志があるわけではないのに、よろよろと歩き始めた。一步一步を歩くとき、体を電撃のような痛みが突き進んでいた。

あたりは火の海だつた。わたしの家はあとかたも残つていなかつた。日照権を侵害してきた超高層ビルの群れは下の三階ほどしか残つておらず、代わりに高々と真つ赤な火の手が上がつてゐる。焼ける臭いと煙の臭い。その一つが一拳に鼻腔へと襲い掛かつてくる。脳の動きがそのせいで鈍つてしまつほどだつた。

肉の焼ける臭い。

脳裏に妻の姿が思い出された。妻の足には火が灯つてゐた。わたしはそれでも歩き続けた。

よく見慣れたコンビニエンスストアもやはり倒壊した後だつた。何か物資を手に入れよう、そう思つていたわけではないが、知らず知らずのうちにわたしは衝撃が起こる前と変わらないものを探してゐた。だが、すべてが変わつてしまつた。なぎ倒され、瓦礫の山となり、踊りまくる火に包まれた。

遠くに歩くにつれ、わたしは人と出会うようになつた。その大半がすでに死人となつていて、必死に助けを求め、うめき、わめき、悲鳴をあげていた。が、わたしに力はなかつた。気力もなかつた。わたしは歩き続けた。背後から誰かが襲いかかり、鈍痛が走つたのはそのときだつた。

目が覚めたとき、わたしは自分と同年代の女性に顔をのぞきこまれていた。一瞬、妻かと思つた。しかしその顔には妻には絶対になかつた大きな傷　　やけどがあつた。

「ここはどこだ？」

わたしは開口一番に尋ねた。果たして天国か地獄か。けれど、女の声は明らかに現実世界の響きをもっていた。

「ここは避難場です」

女は弱弱しい笑みを浮かべたのか、やけどで浮き上がった肌がくしゃりと紙のようにひび割れた。痛みが走るのだろうか、少しばかり顔をしかめているようにも見える。

「いつたい何が起こったんだ？」

わたしの質問は女の顔色を暗くさせた。しかしそれだけは絶対に確かめなければならないのだ。

「いつたい何が！」

わたしは自然と声を荒げていた。

「妻は！ 美智子は！ いつたいどこにいつたんだ！」

女は顔を苦痛に歪ませ、わたしを見下ろしていた。とても辛そう

な顔。女はついに一言発した。

「東京は原爆を落とされたの」

わたしはにわかには信じじることなどできなかつた。できるはずがない。

第一部（後書き）

2ちゃんねるからのかたからの批評も受け付けてあります。

辛口でお願いしますm(一一)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6400c/>

東京が地図から消えた日

2010年10月28日07時07分発行